書　評

川村博忠編：『江戸幕府撰慶長国絵図集成
付江戸初期日本総図』

柏書房　2000年４月

絵図集132頁　解題192頁　360,000円

江戸幕府は江戸時代を通じて，慶長・正保・元禄・天保の４度，全国の諸藩などに命じて各国の絵図を作成させた。本書は，この江戸幕府撰国絵図の最初を飾る慶長国絵図について，現存が確認されるものと江戸初期に作成された日本総図を集成した絵図集であり，各絵図の解題が別冊となっている。

所収されているのは，和泉，摂津，小豆島，周防・長門，筑前，豊後，肥前（２点），肥後の８ヶ国１島の他に，慶長国絵図である可能性が高い越前，備前，阿波の３ヶ国が加わる。日本総図は山口県文書館毛利家文庫と国立国会図書館所蔵の2図である。

慶長国絵図は，他の時期の絵図に比べると小縮尺のものが多いとは言え，料紙の面積で最小でも小豆島の159cm×215cmを測り，最大の絵図は筑前国の386cm×405cmにも及ぶ。これだけ大型の絵図であるから，研究の前提となる閲覧に当たって従来は多大な支障を伴ってきた。中には国の重要文化財に指定されているものもある（周防・長門国）。これらの各絵図について，本絵図集では全体図とともに分割図を掲げ，索引図でその分割範囲が示されている。「収録凡例」によると，「分割図は，原則として記載されている文字が解読できる大きさ」と言い，原図からの縮小率も付されている。とくにこの分割図により絵図の内容を解読し，データを収集することは極めて容易になった。本絵図集の価値がご理解いただけよう。

別冊では冒頭に編者による総論「江戸幕府の慶長国絵図について」が掲げられ，さらに絵図「解題」として各絵図の解説がなされている。和泉国（福島雅蔵），摂津国と小豆島（礒永和貴），越前国（海道静香），備前国（倉地克直），阿波国（平井松午），肥後国（上原秀明）の他は，編者自身が執筆を担当している。さらに，各国絵図に記載された内容のうち，村名が郡毎に一覧できるようになっている。絵図によっては各郡・村に石高が付されているが，それも資料化されているという周到さである。

以上，本書を紹介するのに，まず構成の概要を示し，その有用性を指摘した。次に，若干のコメントを付しておきたい。

最初に，縮尺については，「筑前を例外とすれば大方は三－四寸一里（32,000－43,000分の１）」（12－13頁；頁数の表示は別冊）とされている総論に対し，和泉と摂津国絵図の全体図に付された書誌データでは「５寸１里程度」とあり，小豆島のそれでは絵図における表記に従って「１尺１里」と記されている。各絵図の解題でも同じ数値である。小豆島は，当時は幕府直轄地であり，その代官であった片桐且元の指導によって絵図が作成された。和泉と摂津国も片桐が国奉行を務めており，その絵図も彼の指導があったため小豆島のそれも含めて互いに共通性を持つ。実はこれら３点は，慶長国絵図の中ではかえって特殊例に属するのであって，全体としては絵図間で統一性が薄いことはこの縮尺の検討からも首肯されよう。

分割図は，本絵図集の最大の特徴である。文字はほぼ判読でき，上述の「収録凡例」にうたわれている通りではあるが，和泉国はややピントが甘いと感じられた。ただ，これは原図の方の問題なのかも知れない。

次に，別冊の解題は，各絵図毎に３～５頁である。土台となった各執筆者自身による論文も含め，主要な論文が注・参考文献として掲げられており，不足を感じる諸氏はそれを参照するとよかろう。

各国絵図の中には諸本が知られるものもある。小豆島もその例であり，「本書では最も原本に近いと考えられる笠井家所蔵の小豆島慶長絵図を大型の図版として示した」と説明されている（55頁）。しかし，諸本のうちから本絵図集に所収された絵図を選定した理由が不分明な場合もある。

例えば，江戸初期日本総図のうち「切図三鋪組」のものは「佐賀県立図書館の蓮池文庫所蔵『日本之図』（中略）で代表される」（186頁）のに，所収されているのは毛利家文庫所蔵図の方である。この点について解題に説明はなく，解題の元になっ

た川村博忠論文（「江戸初期日本図再考」『人文地理』50－5，1998）を参照しても，蓮池文庫蔵図が避けられた理由は判然としなかった。

また，阿波国絵図では「徳大本は史料館本もしくは正本の写図とみられる」(99頁)にも拘わらず，徳大本（徳島大学附属図書館所蔵本）が本書で所載されている。この理由については，評者は推測可能である。すなわち，国文学研究資料館史料館では原本の保護のため閲覧が停止され，複製で閲覧することになっているからである。この点は解題でも説明が必要であろう。

さらに，和泉国の解題では諸本の存在が追記されており，若干の比較がなされている。本書の出版により今後の研究の進展が期待できる。

解題は国毎に数頁しか与えられていない故であろう，各国絵図の特徴を浮かび上がらせるような記述になっており，記載されている項目について，複数の国絵図間で統一的な形式とはなっていない。そのため，個別の項目について通絵図的な検討を行うには困難を伴う。この検討を容易にするには，黒田日出男論文(「現存慶長・正保・元禄国絵図の特徴について」『東京大学史料編纂所報』15，1980）の「表Ⅱ　現存慶長国絵図」(周防・長門，越前，摂津，小豆島，肥前，肥後，筑前国）や上原秀明論文(「慶長肥後国絵図の歴史地理学的研究－その構造と表現法－」『熊本短大論集』43－2，1993）の「第3表　慶長国絵図の比較」(さらに和泉国)に集約された通絵図的比較が役に立つ。

このような通絵図的な検討は，本絵図集の特に分割図により今後は大いに促進されると思われ，本書の最大の利用価値として挙げられよう。従来の研究は，一国を対象とし，地域論を志向する研究が多く，評者による阿波国を対象とした拙い研究（本誌39巻1号所収，1997）も然りだったのである。

通絵図的な検討を，ここでは精度を例に示しておきたい。

阿波国（現徳島県）を大局的に眺めると，実際には東部の臨海部では蒲生田岬を突端とする半島部が頂点となり，陸上の国境によって東西に長いほぼ五角形をなす。これに対し，慶長国絵図では南北に長いほぼ四辺形として表現されてしまっている。一群の幕府撰阿波国絵図のなかでも慶長国絵図の精度が極端に低いのである。この点は，上述の拙稿を執筆していた時点で既に気づいており，他国との比較の必要性を感じながらも，実現できないでいた。国絵図を含む前近代の絵図は，程度の差こそあれ一般に，モザイク状に様々な歪みを持っているのが特徴であって，以上のように全体の形状だけで云々するのは片手落ちだが，本書によって予察的検討を行うことができた。

他の慶長国絵図では例えば，越前国も精度が低い。実態としては，南の敦賀郡において敦賀の西，立石岬を突端とする半島部が南西方向に突出し，全体として東西に長い国域となっているのに対し，慶長国絵図では南北を長辺として，突出部も目立たない形で表現されている。これらに比べると，筑前国の精度は高いと思われる。

価格の高さはネックとなるが，このように本書が国絵図研究をさらに進展させるのは間違いない。研究の水準は飛躍的に高まることであろう。

（藤田裕嗣）